

釧路空襲体験談

吉田 喜平

昭和二十年七月十四日の未明のこと、爆音にあわただしく外に飛び出した。二機の編隊が北東の方向に飛んで行くのが見えた。それが敵機とは知らず、日本の空軍もまだ健在なりと思い、思わず万歳を叫んだ。途端にあわただしい妻の叫び声。ラジオのスイッチを入れたら空襲警報が発令され、敵機であることが分かった。あわてて家に駆け込んだが、何をどうしてよいかがわからない。どこかが攻撃されたらしく、銃声を二度程聞いた。その時はまだ二波、三波の攻撃があることは予想だにもしなかった。

取り敢えず子供に防空頭巾をかぶせ防空壕にやり、自分は畳を全部上げて押し入れの前に立てた。これで防空壕の代わりにはなるだろう。再び警報が発令されたので、今度は押し入れの中に入った。それでも不安がつるばかりだ。

その頃、浪花町通りには防空壕が背中合わせに作られていた。私は鉄道工場に勤務していたので、工場の官舎に入っていた。官舎は今の車両所の車庫になっているところがあり、工場までは二、三分であった。

戦況がきびしくなるに従って一億総動員、鉄道も部隊編成となり、工場長は部隊長、各職場はそれぞれ隊組織になっていた。救護班も編成され、当時予備衛生軍曹だった私は救急班の責任者ということになった。隊員は二十名位、職場から選出された職員で構成されていた。救護班は診療所に設置されたので、そこが隊員の集会場所ということになった。

空襲の直撃をうけたのは午前十一時頃だったと思う。警報が発令されたので、すぐそばの防空壕に退避した。入口に立って様子を見ていたら、東釧路の上空あたりに真っ黒な一群、鳥の群れかと思った。途端に工場の上空に來たそのスピードにびっくりした。どこがどう狙われているのか見当もつかない。一瞬にして騒然たる爆音の中に包まれてしまった。防空壕がゆらゆらとゆれた。土砂がこぼれ落ちる、その不気味なこと。土砂

の下敷きになるのではないかと思った。すぐ脇の油庫が直撃をうけて滅茶苦茶に壊されていた。爆撃は三十分位続いたようだ。

一瞬の静寂を思わせるように、爆撃音はぴたと止んだ。半信半疑で防空壕から出て驚いた。すぐ前の客貨車職場が無惨にも柱だけになっていた。診療所も柱だけの無惨な姿に変わっていた。機関車職場は屋根が吹っ飛んで、一カ所炎が上がっていた。水道も電気も電話も一瞬に止まった。水が出ないので消火をすることもできず、只呆然と見守っているに過ぎなかった。

急に家族のことが心配になった。がらんどろとした家の中に一枚だけ畳を敷いて、妻がぼつねんと子供を抱いて座っていた。子供がぐずるので迷惑をかけるから、防空壕から出て来たという。空襲は終わったが、艦砲攻撃のデマが飛んで、官舎の人達はその晩のうちに全部疎開してしまった。鉄道工場空襲の時の思い出である。